



徐々に寒さが深まってきました。令和2年11月1日(日)、総合教育センター善行庁舎において、午前中はチャレンジコースの受講者対象の特別講座3、午後に第7回かながわ教育学講座が開催されました。午後の教育学講座のテーマは「児童・生徒指導」でした。



第7回 かながわ教育学講座



講義「児童・生徒指導」

〈ねらい〉児童・生徒指導で大切なことについて学び、子どもを取り巻く環境や様々な課題、特にいじめへの対応について理解を深める。

平成25年にいじめ防止対策推進法が施行され、教育現場でいじめが広く認知されるようになりました。同法では、いじめは「…(中略)対象となった児童等が心身の苦痛を感じているもの」と定義されています。しかし、親に頼りたくない、チクったと言われたくない、自分が考える自分と他人が見た自分を一致させたいという理由から、児童・生徒が教師にいじめの事実を話さず、本心とは逆の表現や行動をすることがあります。

このため教師は、「いじめの芽」に気付くためのアンテナの感度を高めていく必要があります。そこで大切なのはイメージできる力です。多くの人間の感情に触れ、心を豊かにすることで自身のアンテナの感度を上げることができます。すると生徒の表現や



総合教育センター
加藤充洋 教育指導専門員



行動が本心ではないかもしれないと気付くことができたり、疑ったりすることができるはずです。そのような力を培うための一例として、「いじめの研究論文を読む」、「文学作品に親しむ」、「映画作品をたくさん観る」の3点が挙げられました。

講師の加藤教育指導専門員は、いじめ対応に大事なスローガンとして、神奈川県教育委員会の事故・不祥事防止3カ条を引用しました。その中にある「すぐ対応！心にかかるそのことを」は、学校現場でも大いに役に立ちます。児童・生徒の様子をよく観察し、気になることがあったらすぐに対応することが大切です。現場にはたくさんの

の相談できる仲間がおり、その一人ひとりがそれぞれの持ち味があります。一人で抱え込まずに色々な人の視点を取り入れながら様々な課題に向き合って欲しいと思います。

30分という短い時間でしたが、この後、実際に役割を分担していじめに関するロールプレイを行うに当たり、大変示唆に富んだ講義でした。最後に、講師からこの後のグループ活動では真剣に、いじめられている側の気持ち、いじめている側の気持ち、傍観者の気持ち、その時の先生の心境はどういうものなのか、体験していただきたいという話があり、ロールプレイに向けて心構えを持つことができました。

グループ活動（ロールプレイ）

〈ねらい〉 いじめのロールプレイを通して、教員の対応によって子どもの感じ方が異なることを体験し、いじめを未然に防ぐ方法について考える。



今回のグループワークは、講義を踏まえて、「教員の対応によって異なる子どもの感じ方」を体験するため、いじめのロールプレイを行いました。

ロールプレイでは、「ある子どもの持ち物を数人の仲間が回し合っている」や「仲間内で、ある子どもを無視しようとする場面」など、学校で起こりうる場面を想定してショートストーリーを演じました。被害者、加害者、傍観者、先生と、それぞれの役割を分担し、先生が「いじめではない」と判断したパターンと、「いじめである」と判断したパターンでは、子どもの感じ方にどのような違いがあるかについて考えました。どの班も和やかな雰囲気の中で練習をしていましたが、いざロールプレイが始まると真剣に取り組んでいました。

今回の目的は、ロールプレイを行うことではなく、それを通していじめを未然に防ぐ方法について考えることです。講義にもあったように、いじめは、現場で多く認知されるようになってきており、「いじめの芽」を未然に摘み取らなければなりません。そのために「孤立化の段階をどう防ぐか」、「孤立化の段階でどれだけ適切に対応できるか」「普段からどれだけアンテナを高くしてられるか」、「職場の仲間とどう連携するか」が非常に大切になってきます。

あるグループの担当者は、いじめの対応を野球に例え、「空振りはしてもいいが、見逃しは絶対にしてはいけない。」と話していました。「いじめの兆候と思って生徒に話を聞いたが実際は違った」というのは仕方がないが、「いじめの兆候と思ったことをそのまま対応せずに流してしまう」のは絶対にいけないということです。今日の講義とロールプレイで得たものを心に留め、今後に活かして行って欲しいと思います。

受講者のアンケートより

- ・アンテナの感度を高め、コミュニケーションと連携を大切にし、いじめの問題に対応していこうと思います。
- ・いじめは、まずは「安全の確保をする」ということで、被害者生徒の精神的な部分を支える必要があると考えました。その為、味方であること、「守るよ」ということを感じてもらえるよう、親身になる必要があると思いました。